日本大学歯学部紀要 51，15-22，2023

英国及びデンマークでのルーン文字使用

田嶋　倫雄

Use of runic alphabets in the UK and Denmark

Michio Tajima

はじめに

英国で使用されている言語といえば，法律的には公用語ではないものの英語が「事実上」(de facto）その座に居座っている。しかし，議会，法廷，宗教の分野ではフランス語が公用語扱いだった期間が長期に渡っていたし，その他，ケルト語，アラブ系言語も使われていたであろうし，以前は英語といっても現在ほど統一感もなく，地域ごとに独特の言語が使われてもいただろう。現在となっては，ウェールズ語，スコットランド語，ゲール語らも認められており（British Council），さらにインド・ヒンドゥー語，中国語をはじめ，日本語も含めてその他多くの言語が少数とはいえ使用されている。

英語はローマ字で筆記するのが当然と現在では思われているかもしれないが，10世紀以前にもなるとルーン文字で筆記されていたものもあることが分かっている。古英語期の英語は現代英語とはかなりの違いがあるので，21世紀に使用されている英語の感覚で当時の言語を推し量るのは無粋かもしれないし，また残念ながら英国に現存するルーン文字は，石碑や硬貨などがあるもののその数は非常に少ないため，未解明の部分があることは想像に難しくない。それは実際に使われていた時期が主に10世紀ぐらいまでであったとされていることが関係していそうである。また，中英語期以降の英語で記述された文献や資料と比較すると，古英語で書かれたものが圧倒的に少ないことも理由の一つであろう。記載するための材料として石版，粘土板，硬貨など文字を残すことはできたとはいえ，キャクストンが活版印刷技術と知識をドイツから英国に持ち帰ったのが15世紀であるから，それ以降の活字の普及と比べても，10世紀以前となると分析できる文字のデータ量は比較にならない。小澤（2007）によると，北欧でもヴァイキング時代が終わるまで文書の発給はなく(p.13)，デンマーク最古の国王証書でさえ1085年とされており「少なくとも宗教や行政といった公式の場ではラテン・アルファベットにとって代わられ，そして西ヨーロッパに特有の文書システムに移行した」（p.15）としている。宗教や政治の影響もあり，現代的な文字の使い方がローマ字で使われたことによって，それ以前に使われていた情報を伝える媒体としてのルーン文字はさらにその役割が限定され，徐々に衰退していったのかもしれない。このように様々な理由により，現在はルーン文字ではなく，ローマ字と言われる文字体系で英語は表記されることになっている。

ルーン文字は北欧から入ってきたとされているが，その明確な流入の仕方は今となっては解

日本大学歯学部　外国語分野（英語）
〒101-8310　東京都千代田区神田駿河台１－８－13
（受理：2023年10月３日）
Department of Foreign Languages (English), Nihon University School of Dentistry
1-8-13 Kanda-Surugadai, Chiyoda-ku, Tokyo 101-8310, Japan

明できないだろう。そもそもルーン文字は英語を表記したものではなく，北欧からの移民などが自分たちの言語をそのままルーン文字を使用していただけかもしれないし，英国内で言語が入り乱れ，英国民が使ってみただけかもしれない。とすると当時の英国ルーン文字は英国島内で使われた英語ではない言語（古ノルド語など）ということになる。しかし，明確な線引きをするより，どのようにルーン文字が使われた可能性があるのかを考えるのは興味深い。そこで，本論はルーン文字が英国諸島へ入ってきたとされる時代から，筆記文字がローマ字で確立したころまでに石碑に刻まれたルーン文字を２点例証する。幾種類もあるルーン文字体系のうち，本論では特にデンマークルーンに的を絞り，１）ロンドンに位置する聖ポール大聖堂の墓地で発見された墓標（もしくは石棺の一部）と思われる碑文と，２）デンマークのイエリングにあるルーン文字石碑に触れる。

英国と北欧諸国の言語史的関係

英国と北欧圏は，英国の古英語期には政治的にも密接な関係を持っていたはずである。ヨーク地方は10世紀頃にはノルウェー王に支配されていたし，デンマークのクヌート王は英国での在位期間が1016～1035年で，その息子のハロルド１世，さらにハーデクヌーズ王と続き1042年までデンマーク王の英国統治が続いた。デンマーク，イングランド，ノルウェーをデンマーク王が支配するという，いわゆる北海帝国である。勿論，王に支配されていたということは，それ以前から交流や交易があり，北欧の英国への侵略や英国からの略奪などがあったはずである。海に隔てられていたとはいえ，英国と北欧諸国は言語文化的には混在していたことは不思議ではない。

短期的に英国に訪れるだけでなく，中には北欧から英国へ移住し，定住した者も少なくないはずである。今のイングランドだけでなく，スコットランドやアイルランドやその他の諸島にも北欧諸国の人々は多く出向いている。その多くは一般にヴァイキングと呼ばれている人達であろう。英国デーンロー地方には北欧人のコミュニティーもあった。英国はデンマークから攻められないように，デンマークに対してお金を払っていたほどである（デンマーク税・ルーン石碑もある）（横田，2012. p.17）。使用言語，政治，宗教に影響が及ぶのは自然な流れだったはずである。

英語史からみると英国ではローマ字が500年位から使われるようになり，キリスト教化により普及するようになったというのが通説のようである。英国では西暦500年より前のものでルーン文字は見つかっていないらしいが（エーノクセン，p.198），発見されているものだけで判断するなら，ゲルマン語族系のルーン文字は500年もしくはそれより少し前くらいにイングランドに来たと考えるのが妥当であろう。エーノクセンは，北欧ではルーン文字の刻まれた最古のものといえば紀元後150年頃（p.17）としており，後に英国でも使用されるようになり，800年くらいまではゲルマン諸国の広範囲で使用されていた文字（p.9）としている。西暦５世紀にゲルマン諸族がイングランドに押し寄せてきた際ルーン文字も持ち込んだとするなら（Page，p.32）そして，Robertson（2011）の説明の通り12世紀くらいにはローマ字に置き換わっていくまで，英国内で同じ時期に別ルートで流入し，ローマ字とルーン文字が混在していたことになる。その証拠として，ルーン文字とローマ字が混在した硬貨が発見されているし（Hagland），698年聖クーズベルトの棺には，マタイ，マルコ，ヨハネがルーン文字で，ルカはローマ字で記されている（Page, p.42）。順番通りで記したのならローマ字が後から使われたことになる。

ルーン文字の背景

ルーン文字の起源について所説あり，候補としてエトルリアン文字，ギリシャ文字，ラテン文字などが挙げられるようである。ルーン文字はそもそも北欧に伝わって来たローマ字のアルファベットを起源としているとRobertson（2011）は論じているし，Imer（2010）も160年から375年の間に北欧地域でギリシャ語とラテン語が使われた証拠があると述べている(p.46)。ヨーロッパの言語史を，綴り，語順，文字変化などの面から考察するとギリシャ語かラテン語あたりから発展したとエリオットは述べている（p.22)。また，Robertson（2011）はGerman Futharkがローマ字から来ていると議論している。ここでいうGerman Futharkとは古北欧型ルーン文字のことで間違いないだろう。これらの主張が大筋で正しいのなら，ルーン文字もローマ字も親は同じ兄弟ということになる。

ギリシャ語やラテン語をヒントに，当時の北欧人は自分達なりに書きやすく（木片や石板に掘って残しやすく)，理解しやすく，しかも必要なことを伝えられるような簡略化した文字としてルーン文字を使用することが確立したのかもしれない。北欧現地の者たちが自ら文字を考案したわけではなく，他からの借り物にアイデアをもらったというのが妥当な線のようである。

現存するルーン文字の石碑の起源は正確には判明されていないものが多いが，比較的時期が絞り込める一つの理由は，ルーン文字が使われている硬貨が見つかっているからだろう。硬貨のデザインは時代によって変化してきているので，硬貨に見られるルーン文字と文字体系が同等もしくは類似している点から，時代をある程度特定できるのである。ルーン文字発祥の地はデンマークと主張する者もいれば，スウェーデンであると反論するという議論もあった（エーノクセン）ようである。

ラテン語が起源であるなら，ラテン語から独自に発展し，北欧を中心に使用されたルーン文字が英国に持ち込まれ，後のキリスト教化により，再びローマ字にとって替られたということになる。使われていた文字が何らかの理由でローマ字に淘汰されていったというのは納得できることである。亜流が発生したものの結果的に長男に駆逐されたということかもしれない。歴史にもし別のことが起きていたら，現在の英語はルーン文字の現代版になっていたかもしれない。

ルーン文字が使われていた長い年月のなかで，文字群の種類も多様に変化していった。文字数は，アングロサクソンルーンは24文字から28文字，そして33文字へと増えたが，北欧では（例えばデンマークルーンなどは）24文字から16文字に劇的に減少している（Johnson)。言語地理学的にみても広い北欧圏なので，今ほどの言語や文字の統一感が確立していない時期であれば，方言と同じく文字表記も多様になるのは当然である。中国から漢字を借用し，ひらがなやカタカナが日本で使われ始めたことと文字の発展は類似しているのかもしれない。

英国でもアングロサクソンルーンやアングロフリジアルーンが主流であっても，デンマークルーン文字石碑も見つかっている（また，北方，スコットランド，島々には特有のルーンの変化型がある)。少なくともイングランドではデンマーク王のイングランド支配の影響があったのは間違いないだろう。

ルーン文字がイングランドで実用されなくなったのは11・12世紀くらいだとされているものの，北欧では地域によって中世末期以降までも使われていた。スウェーデンのある地域では19世紀まで使われていたという（エーノクセン)。海を隔てて，英国側と北欧側では衰退の

速度に違いがあったのである。

聖ポール大聖堂の石碑

英国ロンドンに位置する聖ポール大聖堂の南側あたりで墓地の石棺の一部であったとされる石が1852年に発見された。この石碑には，非常に短文であるもののルーン文字と画が彫られていて注目に値する。大英博物館からの借り物として，現在はロンドン博物館に所蔵・展示されている。表面には，ライオンとも犬とも思われる獣が蛇に絡まれている絵がリンゲリケスタイルで刻されている。ロンドン博物館での展示説明パネルには「蛇と闘うライオン」(lion fighting a serpent）と記されている。しかし，このライオンは想像上の獣のグリフィンなのかもしれない。この石碑の画は，彫られただけでなく，赤，白，黒と色付けされていたという(Johnson)。

この石碑の左側壁にルーン文字が二行刻まれている（画像１)。左から右へ進み，二行目になると上下逆さまになり，また左から右へと刻まれている。つまり二行の間がどちらの行から見ても下として読むことになる。左から右へ記述し行の右端までたどり着くと180度回転し次の行の左端からまた始まるという，現在の西洋言語の記述方式ではなく，行が終わっても途切れることなく，そのまま180度回転し次の行へぐるりと継続していくという書き方である。このルーン文字は，西暦千年頃に北欧で使用されていたものとされており，“Ginna and Toki had this stone laid” と英訳されている。和訳すると「ジェナとトキがこのルーン石を創った(彫った)」という具合の意味になるであろう。画家の署名のような意味合いが取れるかもしれない。ルーン文字の語順を見ると，Ginna and Toki というより，Ginna が Toki と（一緒に）この石を置いた，と意訳することもできるかもしれない。さらにこの「置いた」(laid）というのは have を使った使役動詞と思われるが，石を横たえただけではなく，もちろん獣と蛇とルーン文字を「彫った」･「この作品を作成した」という意味かもしれない。ロンドン博物館の説明によれば，聖ポール大聖堂のすぐ外で見つかったこの石碑は11世紀初頭のものらしい。リンゲリケスタイルの画が彫られているということは，10世紀後半から11世紀前半のデザインであるとするのが妥当な推測である。このルーン文字の短い文章について，2012年のロンドン博物館のウェブサイトでは，「ひょっとすると1016年から1035年の間にイングランドを支配したクヌート王に従ってデンマーク領から来た者の墓の一部なのかもしれない」と記載されていたが，現在ではこの説明は削除されている。

> Drawing of the lettering on the left-hand edge of a tombstone found in London. It is a two-line inscription in the runic alphabet used in Scandinavia around AD1000：'：[k] ina： let： lekia： st ｜ in： þensi： auk： tuki：'. The language is Old Norse, and it means 'Ginna and Toki had this stone laid'. The stone, which was found just outside St Paul's Cathedral, probably marked the grave of a follower of the Danish king Cnut, who ruled England from 1016 to 1035.
> http：//www.museumoflondon.org.uk/London-Wall/Whats-on/Galleries/medieval/People/147008/（Museum of London. 2012年８月確認のウェブサイト。現在はこの説明はサイトには掲載されていないようである。)

推測の域を出ないものであるなら削除が望ましいという博物館側の判断であろう。

恐らくはこの石碑の隣には誰のための墓石なのかが分かるように死者の名も刻まれていたはずだろうということも推測されている

(Johnson)。実際，ロンドン博物館ではこの石碑の横に墓石の一部とされるものも展示されている。

このルーン文字の特徴として，各単語間に二つの点が縦に並べられていることから，単語ごとに一文字空白を設ける現在の英語表記的な記し方が容易に想像できる。二つの縦に並ぶ点付きであることは，このルーン文字を丁寧に彫り完成させたことを意味するかもしれない。欠落している部分の単語がもし Ginna であるなら，ロンドン博物館のホームページの説明文のように，おそらくここに入る文字は i であろう。

ルーン文字一行目 ᚱ（欠落）ᚾᚾ：ᛚᛁᛏ：ᛁᚱᛁᚾ：ᛋᛏ
ルーン文字二行目 ᛁᚾ：ᚦᛁᚾᛋᛁ：ᚾᚢᚱ：ᛏᚢᚱᛁ：
対応文字一行目　k（欠落）na：let：lekia：st
対応文字二行目　in：þensi：auk：tuki：

画像 1（聖ポール大聖堂の外で発見された墓石と思われるルーン石碑の左側壁。筆者撮影 . 面 1：ルーン文字）

リンゲリケスタイルの画が彫られているのは，このルーン石碑の表面である（画像 2）。

この獣と蛇の絵は，デンマークのイエリングにある石碑（画像 4）と無視できない類似点がある。その石碑に彫られていたルーン文字の内容は，かなりの違いがあるとはいえ，イエリングの石碑も想像上の獣と蛇の彫り物がはっきりと見て取れ，共通点が一目瞭然である。Johnson は，ずばりイエリング墳墓のルーン石碑をモチーフにした stylized　reproduction と断定している。

画像 2（聖ポール大聖堂の外で発見された墓石と思われるルーン石碑の正面画。筆者撮影 .　面 2：獣と蛇）

画像 3（デンマーク，イエリングで発見された石碑。筆者撮影 . 面 1：ルーン文字）

リンゲリケスタイルといえば，獣，鳥，その他動物や螺旋模様，十字架などが描かれている特徴があるといえそうであるが，ロンドンの石碑もイエリングの石碑も，かなり類似している。この様式をイングランドに伝えたのがクヌート王であるとされており，やはり聖ポール大聖堂で発見された石碑はデンマークのモチーフが残されたものなのであろう。聖ポール大聖

画像 4（デンマーク，イエリングで発見された石碑。筆者撮影 . 面 2 ：獣と蛇）

（画像 5 ：獣と蛇の彫り物にも色付けられていた。Bollmann, 2018）

堂のルーン石碑と同様に，イエリングのルーン石碑も，別の面には獣と蛇の画が彫られていて，石碑の側面の使い方さえも同じである。

こちらの画ももともと赤，青，黄色，黒と色付けされていたそうである。画像 5 はイエリング石碑の面 2 を分かりやすくイラスト化したものであるが，National Museum of Denmark の職員の説明によれば実際の色を忠実に再現したものとは断言できないそうなので，あくまでも参考ということになる。

イエリングの石碑にはハーラル王の文言が彫られてあり，聖ポール大聖堂のものはルーン文字を彫刻した人物の名前程度と，情報量としてはかなりの差がある。Page（1987. p.45）によればルーン石碑の三面にルーン文字が以下のように彫られている。なお，ローマ字音価はおおよそのものとされているので，正確とは言い切れないところが残念である。

（面 1 文字面）
：haraltr：kunukR：baþ：kaurua
kubl：þausi：aft：kurmfaþursin
aukaft：þąurui：muþur：sina：sa
haraltr ias：sąR. uan tanmaurk
（面 2 獣と蛇）
：ala-auknuruiak
（面 3 キリスト肖像画）
auktanikarþi kristną
（Page，1987. 三面に分けた表記は本論筆者による）

＜英訳＞
（面 1 文字面）
King Harald ordered these kumbls made in memory of Gorm, his father, and in memory of Thyra, his mother; that Harald who won for himself all of Denmark
（面 2 獣と蛇）
and Norway
（面 3 キリスト肖像画）
and made the Danes Christian
（The Jelling Stone. National Museum of Denmark. 三面に分けた表記は本論筆者による）

本論で掲載できる画像はないが，もう一つの面には蔦のようなものに絡まれた人物らしき画が彫られている。ルーン文字の意味するところから，長年キリストが描かれているだろうと信じられていたが，2020年に発見された硬貨のルーン文字の内容から，北欧神話の最高神とされるオーディンではないかという議論が勃発し

た。この議論が政治色を帯びるようになり，パスポートにすら使用されているこの絵が，デンマークの歴史を大きく塗り替えてしまうかもしれないという大問題に直面することとなった。

この描かれている人物（もしくは神）は，キリストでもありオーディンでもあるとしておくのが無難のように思われる。ヨーロッパのみならず世界中でキリスト教の布教には，布教先の地方や国において様々な宗教から人々を改宗させる際，現地の宗教や神やそれらにまつわる文化をある程度取り入れて，徐々に進められてきている事実がある。同じことがデンマークで行われたとするなら，それまで北欧の神とあがめられていたオーディンを即刻否定・廃止するより，神の位置にいる存在としてキリストも重ね合わせ，同一神のような表し方で当時の国民を説得する手段がとられたと仮説を立てる方が，歴史の理解はし易くなりそうである。

ちなみにイエリングのルーン文字の石碑は現在もイエリングに置かれたままである。レプリカはコペンハーゲンの国立博物館に展示されていたが，2023年８月の時点では，館内スペースの関係上展示されていない。特別展のスケジュールが変わり，展示スペースに余裕があれば，再度展示されることもあるかもしれない。

ルーン文字からローマ字への文字転換

北欧圏ではルーン文字の知識がある者がいたことは確実とはいえ，後世活字が一般に普及するころにはすでに，ローマ字が主流になっていたとするなら言語史的研究面からしたら残念な流れである。それは先述のようにルーン文字が保管用文書文字ではなかったからかもしれない。広範囲で圧倒的に使用されていたローマ字の普及はルーン文字の一般化を確実に阻むことになり，さらに英国では中英語期以降，ラテン語・フランス語が上流では使用されていたという事実は，ルーン文字の復活の余地はなかったのである。そして北欧圏においても，ルーン文字はローマ字へと置き換えられていったといえそうである。

最後に

ルーン文字は，20世紀にはトールキンが『指輪物語』などで弱冠使用してみたり，また一部占いで使用されたりしているが，実際にルーン文字が使われていた時代があったという事実は，言語史の視点からしても無視はできない。物語や占いの世界だけでなく，記述言語の競り，宗教や政治などが絡んでいたことは，ルーン文字がれっきとして文字であったこととして現実的である。教会がローマ字を使うように仕向けルーン文字を追いやろうとしたのなら，聖ポール大聖堂の一部にルーン文字の刻みが見つかったのは，何とも皮肉ともいえるだろう。使用文字の変更は，即座には叶わず，一世代や二世代は必要であろうから不思議ではない。建築に携わった職人のいたずらか，ローマ字に対してルーン文字を使う文化の人間の意地なのか，それとも偶然ルーン文字が彫られた石が大聖堂建築の際に石材として使われたのか，職人が北欧の人間だったのか。今となっては正確には確認できないが，聖ポール大聖堂で発見されたルーン文字の石碑は，少なくともルーン文字は英国に存在したという証の一つであり，また北欧文化の影響が確実に押し寄せてきていた時代があった事実を示すものなのである。

References

Bollmann, S. 2018. The Jelling Stone's Great Beast (Mammen Style). World History Encyclopedia. https：//www.worldhistory.org/image/9348/the-jelling-stones-great-beast-mammen-style/（Retrieved on August 5, 2023）

British Council. Language. https：//study-uk.britishcouncil.org/why-study/about-uk/language (Retrieved on July 17, 2023)

エリオット，ラルフ・W・V 2009.『ルーン文字の探求』吉見昭徳（訳）横浜：春風社 Trans of *Runes*： *an introduction*. By Ralph W.V. Elliott, 1959. Manchester University Press.

エーノクセン， ラーシュ・マーグナル2007.『ルーンの教科書』荒川明久（訳）東京：国際言語社．Trans of *Runor*： *Historia, tydning, tolkning*. By Lars Magnar Enoksen, 1998. Historiska Media.

Hagland, J.R. 2010. Two scripts in an evolving urban setting： the case of medieval Nidaros once again. *Futhark*： *International Journal of Runic Studies* 1, 177-187.

Imer, L.M. 2010. Runes and Romans in the North. *Futhark*： *International Journal of Runic Studies* 1, 41-64.

Johnson., P. 1999. *Runic Inscriptions in Great Britain*. Somerset： Wooden Books.

Kershaw, J. 2010. Viking-Age Scandinavian art styles and their appearance in the British Isles. Part 2： Late Viking-Age art styles. The finds research group AD700-1700. Datasheet 43. 1 -8.

Museum of London. http：//www. museumoflondon.org.uk/London-Wall/Whats-on/Galleries/medieval/People/147008/（Retrieved on August 1, 2012）

小澤実 2007.「ルーン石碑から国王証書へ：11・12世紀デンマークにおける土地所有確認の変容」 ルーン石碑から国王証書へ．名古屋大学大学院文学研究科． ピエール・トゥベール教授招聘事業報告書 , 11-17

Page, R.I. 1987. *Runes*. University of California Press.

Robertson., J.S. 2011. How the Germanic Futhark Came from the Roman Alphabet. *Futhark*： *International Journal of Runic Studies* 2, 7 -26.

The Jelling Stone. National Museum of Denmark. https：//en.natmus.dk/historical-knowledge/denmark/prehistoric-period-until-1050-ad/the-viking-age/the-monuments-at-jelling/the-jelling-stone/（Retrieved on July 29, 2023）

横田由美 2012.『ヴァイキングのイングランド定住－その歴史と英語への影響』 *The Vikings in England － Its History and Impact on the English Language*. 神奈川県相模原：現代図書